

## 1 はじめに

本校は香川県の北西部、善通寺市にあり、「四国こどもとおとなの医療センター」に隣接している。県下で唯一の病弱特別支援学校であり、小・中・高合わせて100名以上の在籍がある。教育課程は大きく分けて3つ（1～3組グループ）あり、中学部1組は心臓などの内部疾患の他、自閉症スペクトラムやADHDなどの発達障害を併せ有し、強迫性障害や不登校・ひきこもりを伴う精神疾患のある生徒が在籍し、中学校に準ずる教育を行っている。集団生活になじめずいろいろなトラブルを引き起こし、適応障害等の精神疾患を併発して本校に入学・転入学してきている。私たちはこれまでも生徒が病状上の課題を抱えながら苦しんでいる姿をたくさん見てきた。

私たちは自立活動の指導を通して個々の生徒が過去のトラウマや日々のストレスを少しずつ整理し、自分に合った習慣形成を身に付けてほしいと願っている。入学・転入学後は生徒自身とそれを取り巻く身近な人たちにとって見通しのもてる学校生活にしていくための最も大切な時期といえる。昨年度入学した生徒Aもそうした生徒の一人である。

## 2 事例（令和3年度）

### <対象生徒Aの実態>

中学部1年1組は精神疾患や心臓病のある生徒5名が在籍している。生徒Aは小学6年生のときにゲーム依存により隣の医療センターに入院した。入院中に治療の一環として本校に体験登校（在籍は地元小学校）し、その後小学部に転入した。主治医の診断によると適応障害、家庭限局性行為障害、自閉症スペクトラム、多動障害があり、日本版WISC-IVでは全検査FSIQの値が71である。対人関係がうまく結ばず暴言や物損があり、孤独感からゲーム依存になり家族との関係も悪化したと聞いている。しかし、入院により家族や学校と距離を置き、主治医や看護師に自分の悩みに寄り添ってもらえたことから、自分を見つめ直し、ゲーム依存から回復することができた。入学時の印象は葛藤を抱えてはいるが、自己改善への意欲は高く、支援を求めている生徒だと感じた。

### (1) 1学期の取組

自立活動の指導計画を作成するにあたり、国立特別支援教育総合研究所の研究による「Co-MaMe（連続性のある多相的多階層支援）」を活用して必要な支援・配慮事項を整理した。Co-MaMeは心理、学習、学校生活、社会性、身体、自己管理の6つのカテゴリーから成り立っている。各項目の内容の中で優先して取り組む教育的ニーズのあるものとして3点をあげた。

#### 自立活動のねらいと評価

サブカテゴリー	生徒Aの課題
心理	思うように課題が解けないと、不安感を態度で表す。
社会性	授業が始まってもしていることをやめられない等切替が難しい。
自己管理	過去の失敗経験やテストの不安により授業に参加できない。

Co-MaMeをもとに自立活動のねらいを以下の5項目とし、1学期の評価をまとめた。

自立活動の区分	自立活動のねらい	自立活動の評価
健康の保持	不調を訴えたときはトイレに行ったり、別室でクールダウンしたりする。	教室や別室でクールダウンすることで、気持ちを切り替えられるようになってきた。
心理的な安定	困ったことを指導者に伝える。	具体的に困ったことを指導者に伝えられるようになってきた。
環境の把握	好きな活動をする前に授業の始まりの時刻や活動できる時間を確認する。	活動できる時間を確認することで、終了時刻を守れるようになってきた。
人間関係の形成	言葉や表情から相手が考えていることを推測する。	相手の気持ちを推測し、対応を考えられるようになってきた。
コミュニケーション	話しやすい環境の中で、落ち着いた態度で自分の気持ちを伝える。	落ち着いた態度で自分の気持ちを伝えようとするようになってきた。

### ① 健康の保持

生徒Aは1日6時間の授業を受け続けることにストレスを感じている様子が見られた。特に定期テストの前後は精神的に不安定になり、ひどくせきこんだり、体に虫がはっていると訴えたりすることが増えた。友達と反発し合い、トラブルから授業を飛び出すこともあった。そんな時は話を聞き、別室のソファで休む、早退する、体調を整えてから授業に参加するの中から選択できることを伝え、本人の選択にまかせた。初めは早退を強く訴えたが、次第に教室や別室で休むことで再び授業に参加できるようになってきた。

授業の様子



### ② 心理的な安定

本校では5月に運動会を実施している。生徒Aは過去の体験から人前で走ることに抵抗を感じ、練習に行けずに教室に残ることがあった。中学部1組では複数の教師が授業に入り、個別の生徒対応が必要になった時に対応しており、気持ちを切り替えられるように話を聞いたり、見守ったりした。三者面談では、親子が気持ちを伝え合う中で保護者が「それでも走る姿を見たい。」と本人に話したことで、自ら「運動会に出る。」と申し出ることができた。出るか出ないかの2択だけでなく、今できるところから段階的に取り組む方法を知ることによって参加を決意することができた。

### ③ 環境の把握

本学級の生徒はイラストを描くのが好きな生徒が多く、生徒Aもその一人だった。ただ、描くことに夢中になり、授業が始まって「別室で続きを描きたい。」と申し出ることがあった。描き始めた絵が気になって授業に入っても学習に集中できないという。そこで、絵を描く前に描ける時間や終了時刻を守れるのかを確認してから行動に移すようにした。生徒Aも「自分は描き終わらないと気が済まないから、時間がなくなるときはやめておく。」と自分で言うようになってきた。

### ④ 人間関係の形成

学級の係活動においては体のだるさを訴えることが多かった。そんなある日、白板消しをしていた生徒Bが「一人でするのは嫌だから、もうしたくない。」と訴えた。驚いた様子を見せていた生徒Aも生徒Bの気持ちを聞き、「次は自分もするから。」と答えることができた。相手に対して不満に感じることもあっても過度に感情的になったり、強要したりせずに自分の気持ちを伝えた生徒Bを助けたいと思う気持ちが自然に芽生えたことが伝わってきた。それからは授業がおわると、すぐに二人で白板を消すようになった。

### ⑤ コミュニケーション

生徒Aは過去に腹が立ったことやストレスを感じたことを話し始めると、止まらない傾向があった。学級ではいろいろなエピソードを話し合った。教師も話のローテーションに加わり、「面白かった話」はもちろん、「失敗した話」、「けがをした話」などもテーマにした。トラブル時に支えてくれた人の話も話題にし、過度に失敗を恐れるのではなく、困ったことは相談するようになってほしいと伝えた。

生徒Aと生徒Bが久しぶりに将棋をした時があった。初めは和やかに指していたが、形勢が不利になってきた生徒Bが不満を言い始めた。うなずきながら聞いていた生徒Aも、だんだん落ち着かない様子になってきた。そして、改まったように「これ以上すると、けんかになってしまうから、やめよう。」とはっきり伝えることができた。いつもはけんかになってしまうからと教師に対応を依頼していたが、自分の気持ちを整理し、落ち着いて相手に伝えることができた初めての日になった。

## (2) 2学期の取組

生徒Aの全体像を客観的に把握するために、「わになるシート」(※1)を使用することにした。シートの記入と聞き取りにより、指導者と本人の意識にかなりの開きがあることがよく分かった。また、「気持ちの支えになる存在がある」の欄に友達の名前を挙げ、私たちが思っている以上に友達と一緒に学習したいという気持ちをもっていることが分かった。また、生徒Aが自分の気持ちをより伝えやすくするために、不調を訴えたときに「こころとからだのメーター」(※2)を使用することにした。このシートを使用することにより、不調時の心の状態を知ることができた。

(※1) 大阪府立刀根山支援学校が作成し、昨年の全病連大会で発表された。6つの項目と37の質問から構成され、Co-MaMeと自立活動の観点に共通する内容となっている。

(※2) 心理教育ツールの作成と普及に取り組んでいる「NPO法人ふるすあるは」が作成した「こころとからだのメーター日記」の一部を活用した。

以上より得られたことを念頭に置き、2学期に優先して取り組む教育的ニーズについて、1学期と比べて変化が見られた箇所を修正し、指導の見直しを行った。2学期はCo-MaMeの各項目にある内容について優先して取り組む教育的ニーズとして右の4点をあげ、下線部を追加、変更した。

サブカテゴリー	生徒Aの課題
心理	気分の浮き沈みがあり、情緒不安定になりやすい。
社会性	不調を訴え、授業に参加できないことがある。
身体	腹痛や手足のかゆみ等、体の不調を態度で表す。
自己管理	過去の失敗経験により、授業に参加できないことがあるなどストレスへの対処が身に付いていない。

### 自立活動のねらいと評価

Co-MaMeと「わになるシート」をもとに生徒Aの自立活動のねらいを以下の5項目とし、下線部を追加、変更し、2学期の評価をまとめた。

自立活動の区分	自立活動のねらい	自立活動の評価
健康の保持	不調時は自席でクールダウンすることで、毎日6時間の授業に参加できるようにする。	不調時は無理をせずに自席でクールダウンすることで、6時間の授業に参加できることが増えた。
心理的な安定	「こころとからだのメーター」を記入することにより、気持ちを整理し、対応を指導者に相談する。	気持ちを整理し、対応を話し合うことで楽しいことに目を向けられようになってきた。
環境の把握	好きな活動をする前に授業の始まりの時刻や活動できる時間を自分で確認する。	好きな活動をする前に授業の始まりの時間や活動できる時間を自分で確認できるようになってきた。
人間関係の形成	友達や指導者とのやり取りを広げる。	自分から話題に加わり、友達や指導者と話をするようになった。
コミュニケーション	落ち着いた態度で自分の気持ちを伝え、相手の話も聞く。	落ち着いた態度で自分の気持ちを伝え、相手の話も聞こうとするようになってきた。

#### ① 健康の保持

本学級に在籍する5名のうち体調や病状により1日6時間の学習が可能である者はこの時点で2名であり、登校していても、別室でのクールダウンを必要とする生徒は他にもいる。そんな時、生徒Bが入院することになり、生徒Aが一人で授業を受ける時間が増えた。過度に不調を訴えたときは保健室に行くよう促し、異常がないことが分かると安心して授業に戻れたこともあった。定期受診の際には担任が同行し、学校での状況を主治医にも伝えた。また、一人で授業を受けたことのある上級生にも相談した。

#### ② 心理的な安定

授業開始時刻になっても不調を訴えるときには「こころとからだのメーター」を記入し、自分の状態を知るとともに、指導者に伝えられるようになってきた。一人で授業を受けなければならない、怖い夢を見た、トイレのスリッパが乱れていたなど気になったことを考えすぎる傾向があり、そうする方が落ち着けると考えていることが分かった。しかし、実際には過去のことを思い出し、他人を批判し、より不安定になる傾向が見られた。そのため、私たちは考えすぎないようにアドバイスし、楽しい話題に変えたり、上級生と参加する活動に目を向けるよう促したりした。生徒Aも遅れて授業に参加した後、「授業に出た方が楽しかった。」と明るい表情で帰ってくることもあった。

#### ③ 環境の把握

中学部1組では自立活動の時間に1～3学年全体をグループ分けし、希望する活動に取り組んでいる。生徒Aは「イラスト」を選択し、タブレット端末を見ながらキャラクターや漫画の登場人物を細かい部分までよく見てじっくり仕上げた。集中して描いていると気持ちが落ち着くと話し、納得のいく作品ができるとうれしそうに報告し、称賛を受けた。思うように描けないと気持ちを切り替えられず別室でクールダウンすることはあったが、教科担任に授業を受けられなかったことを謝りに行く姿も見られた。



#### ④ 人間関係の形成

生徒Aが一人で授業を受けていることを気に掛け、上級生が教室に来てくれるようになり、人間関係に広がりが見られた。今までは誰かが話している会話に入ることが見られない生徒だったが、このころから自分から話題に入ってくるようになった。生徒Aが落ち込んでいることに気づいて生徒Cが声を掛けることもあった。そんなときはすっきりした表情で報告し、気持ちの整理ができていたことが伝わってきた。

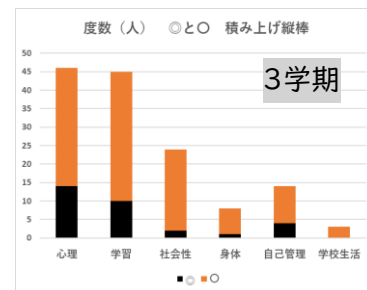
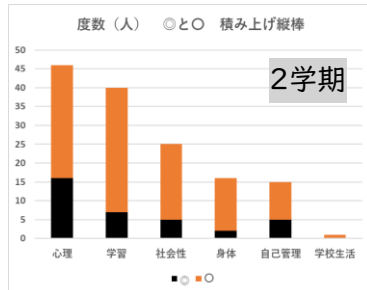
#### ⑤ コミュニケーション

家でしているゲームのデータが消失したこともあった。同じような経験をもつ上級生や指導者に相談し、経験談やアドバイスを聞く日が続いた。親身になって相談にのってもらえたことで、落ち着きが見られるようになってきた。また、アドバイスを本気で聞いたことで、人の話も聞こうとするようになり、一方的な話から会話のキャッチボールができるようになってきた。

### (3) 教員によるアセスメント

生徒Aの教育的ニーズを明確にするために、2学期と3学期に1組グループの職員(回答数8)にもCo-MaMeのアセスメントシートの記入を依頼し、優先して取り組む教育的ニーズ「◎」と教育的ニーズがある「○」を集計した。

Co-MaMe：アセスメントシートの集計結果より



集計結果によると、優先して取り組む教育的ニーズ「◎」では『心理』が最も多く、そのなかでも『気分の変動』と『情緒の安定』の項目に「◎」が多かった。生徒Aにおいて最も優先して取り組む教育的ニーズは『心理』であり、それに付随して『学習』『社会』『身体』『自己管理』があることが分かった。3学期になると、『心理』に変化は見られないが、『社会性』『身体』の減少が見られた。1年生の終わりに近づくにつれて、『学習』の教育的ニーズが高まっていることも分かった。

### 3 おわりに

生徒Aは入学時の面談で「友達が欲しい」「勉強ができるようになりたい」の2点をあげていた。昨年度は友達と楽しく過ごせるようになり、学習面においてはは分からないことにいらいらしながら無理に解くのではなく、休憩を入れることの大切さを理解できるようになってきた。保護者からは長期休業中、今まで拒否していた宿題をしてから遊ぶようになった。ストレスを感じているときは次に観る映画の話などをしていると聞いている。今年度はスクールカウンセラーへの相談も始めている。学習内容に関連したいろいろなことに興味をもつようになっており、生徒Aの気づきを学級の調べ学習に取り入れるようにしている。別室へは行かずに不調時の状態に応じて自席でクールダウンしたり、体を起こして授業を聞いたりできるようになっている。ただ、学年が上がるにつれ、テストや進路についての不安感が増大することは考えられる。本人も困ったときには指導者に相談しており、気持ちの折り合いの付け方、本人に合った進学之道を探っている。

本校には他にもそれぞれ課題のある生徒がいる。不安感が強く、学年相応の学習をすることに心理的負担を感じやすい。私たちは話を聞くことで個々の生徒の心理的不安をできるだけ軽減し、取り組みやすい内容や興味のあることから学習を進められるよう試行錯誤を続けている。今はまだ葛藤を抱えている生徒たちも、何かのきっかけで少しずつ変わっていける可能性を秘めている。一人一人の特性を理解し、無理のない目標を明らかにして、生徒が学校そして社会の中で自分の居場所を見つけ、周りの人との人間関係を構築できるよう支援していきたい。